

平成 21 年 5 月 29 日現在

| | |
|----------------|--|
| 研究種目：基盤研究 (C) | |
| 研究期間：2006～2008 | |
| 課題番号：18530716 | |
| 研究課題名 (和文) | 日・中・韓三国の比較教育学的研究に基づく教科に関する教師教育スタンダードの開発 |
| 研究課題名 (英文) | Development of Professional Teaching Standards of School Subjects: Based on the Comparative Study among Japan, People's Republic of China, and Republic of Korea |
| 研究代表者 | 三浦和尚 (MIURA KAZUNAO) 愛媛大学・教育学部・教授 研究者番号:40239174 |

研究成果の概要：日・中・韓三国の教師教育の制度の現状とその分析を行った。また、10年程度の教職経験者を念頭に置いた教職経験と職能成長に関する調査研究を行い、教師の専門的成長の実態と、その意識を明らかにした。それらをベースに、教師教育スタンダードの内容項目についての検討を行い、教師教育スタンダードとして、「教職スタンダード」「小学校全科スタンダード」「中学国語スタンダード」「中学社会スタンダード」「中学数学スタンダード」「中学理科スタンダード」を作成することができた。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 1,600,000 | 0 | 1,600,000 |
| 2007年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2008年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 総計 | 3,400,000 | 540,000 | 3,940,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：各教科の教育，教科に関する教師教育

1. 研究開始当初の背景

教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」(1997年7月)では、「今後特に求められる資質能力」を示した上で、教員養成カリキュラムの大幅な改訂が提言され、実施された。さらに、中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」(2005年10月)、中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(2006年7月)では、教師の実践的指導力が強調された。その流れの中で、教員養成カリキュラムの中に「教職実践演習」が必修化されたり、教員免許更新制などの施策が具体化したりしている。

しかし、教員の資質能力とは何かについて、

これまでもさまざまな形で語られながら、それらは一つの見方にすぎないものであったり、抽象的理念にとどまるものであったりする傾向は否定できない。「教員養成」「教員研修」を念頭に置いた具体的な資質・能力の明示は、いわば近年の教員養成課題であると言える。その課題追究の一つの筋道として「教師教育スタンダードの策定」があり、国内でもいくつかの試みがなされている。しかし、諸外国の研究やシステムを参考にしながら、なおその具体性において十分とは言えないところが見受けられるのが現状である。

本研究グループに属する7名のうち5名は、これまで、教員養成カリキュラム改革のための研究の一環として、教育実習のあり方

と、それに連動する「教科教育科目」また「教科に関する科目」の教授内容・方法の検討を行ってきた(平成12～14年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究課題「教育実習を核とした教科教育指導プログラムの開発に関する実証的、比較教育学的研究」、平成15～17年度科学研究費補助金萌芽研究 研究課題「小学校教員養成における「教科に関する科目」のカリキュラムフレームワークの開発」等)。

特に、「教育実習を核とした教科教育指導プログラムの開発に関する実証的、比較教育学的研究」では、教育実習段階の教科教育実践力を「教育実習到達度段階表」としてまとめることができた。これは、授業レベルでの教育実践力の具体を示したものである。

そういった研究の流れの中で、教師の資質能力を、さらに全体的に捉え、教科に特化しない資質能力、また教師の職能成長を見通した資質能力を「教師教育スタンダード」として明らかにする必要性をもって、本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究では、東アジアに位置する日本・中国・韓国の「教科に関する教師教育」制度と教育内容について、その特色を解明する。そしてその基盤に立ち、教員養成と教師の職能成長とを視野に入れた、教科に関する教師教育スタンダードの開発を目指す。

3. 研究の方法

日本・中国・韓国における、教科に関する近年の教師教育制度と、その内容である教師教育プログラムの特質を、比較教育的に明らかにする。

研究代表者と分担者の所属する大学の各県における現職の教師を対象に、ライフヒストリー調査を行い、現在の教師としての水準に到達することにいかなる経験と学習が貢献してきたかを明らかにする。すなわち、現職教員の、生涯にわたる教師としての専門的成長の実態を提示する。

アメリカのスタンダード(National Board for Teaching Standards 等)を中心とする考察を行う。

以上の成果を総合することによって、日本型の教科に関する教師教育スタンダードの開発を行う。

4. 研究成果

(1) 韓国公州教育大学校 李明珠教授、中国北京師範大学教育学院 郭華教授、同 樊秀麗研究員の外国研究者を招聘し、教師教育スタンダード、また現職教員の研修制度について、「現職教育に関する日・中・韓共同セミナー」を開き、意見交換を中心とした研究交流を行った。

①日本の現職教育の概要(発表者:愛媛大学三浦和尚)

②韓国における現職教育の現状(発表者:公州教育大学校 李明珠)

③中国における現職教育の現状(発表者:北京師範大学教育学院 郭華)

それぞれの国の研修制度の特徴を比較して捉えることができた。

(2) 現職教員の、生涯にわたる教師としての専門的成長の実態を把握するための「教師のライフコースと職能成長に関する調査」(5府県で約500人の小・中学校現職教員を対象)を実施した。

いわゆる授業実践力(構想力、展開力、評価力)に係って、採用当時と比較した現在の力量を、教師による自己評価から明らかにした。すなわち「教職経験年数とともに力量が向上する」という単純な線型関係を前提とするのではなく、どのような課題に対して、いつ成長のピークが訪れているのかを検証し、そのうえで、教職経験10年前後の教師が、自らの力量をどのように自己評価しているかを、新任教師やベテラン教師たちとの比較からとらえた。

その結果、「8年以上15年未満(教職経験10年目前後)」にある教師たちは、特に「8年未満」の教師たちと比べた場合、自らの授業実践力(構想力、展開力、評価力)の向上について、最も手応えを感じている層だと考えられること、また、「8年以上15年未満」の教師たちの自己評価は、他の教職経験年数に位置する教師たちの自己評価に比べて最も低い水準にあったことなどが明らかになった。

(3) アメリカのスタンダード(National Board for Teaching Standards 等)を中心とする考察をもとに、日本版スタンダード(Japanese Model)について、学校種、教科等の枠組みを設定した。

(4) 以上のような経過のもとに、教師教育スタンダードの内容項目についての検討をおこない、以下のような教師教育スタンダードを作成する事ができた。

- 教職スタンダード
- 小学校全科スタンダード
- 中学国語スタンダード
- 中学社会スタンダード
- 中学数学スタンダード
- 中学理科スタンダード

ちなみに、「教職スタンダード」と「中学国語スタンダード」の枠組みを例示すると、以下の通りである。

「教職スタンダード」

スタンダード1: 教職に対する理解と責任感
今日の社会における学校教育の位置づけと役割、学校教員の職務内容とその意

義、子どもの健康・安全・心身の発達に対する責任について理解し、自信と誇りをもって職務を遂行しようとしている。

スタンダード2：子どもの理解と発達支援
子どもの発達に関する知見に精通し、その知見に基づきつつ、また子どもとの日常的なコミュニケーションを通して、個々の子どもの心身・生活・学習の状況を把握し、その発達と社会的自立を支援しようとしている。

スタンダード3：教科指導に関する理解と実践的指導力

教科内容や教育課程に関する知見に精通し、それぞれの教科のなかで、あるいは教科を横断して子どもが学習する必要がある内容とそれに応じた指導法を適切に判断しようとしている。また、授業を実践するのに必要な技能を有し、適宜、授業の改善を図ろうとしている。

スタンダード4：学級運営および学校運営
子どもが安全にかつ安心して生活を送ることができるよう学級および学校を運営し、環境や組織体制の整備・充実を図ろうとしている。

スタンダード5：子どもに対する評価
さまざまな評価方法の長所・短所を理解し、適切な評価に基づいて教科指導・生活指導・生徒指導・進路指導を行い、子どもたちが現在および将来の学習・生活を自分で計画・設計し管理することができるよう促そうとしている。

スタンダード6：教員に対する評価および学校に対する評価

教科指導・生活指導・生徒指導・進路指導・学級運営・学校運営の成果や質を適切に評価し、その評価結果に基づいて、教育活動や職務遂行の改善・充実・洗練を図ろうとしている。

「中学国語スタンダード」

A. 国語科授業基礎力

スタンダードⅠ：生徒の理解

熟練した国語の教師は、生徒がどのように学んできたのかを知り、生徒一人ひとりの学習背景を知り、生徒のことば及び言語文化についての知識・能力の状況を把握している。

スタンダードⅡ：国語の理解

熟練した国語の教師は、ことばおよび言語文化に関する深い理解とともに、その社会における意味・意義を把握し、文化全般に関して広い知識をもち、国語と他の学問領域との関係を理解している。

スタンダードⅢ：認識力・思考力・想像力の指導

熟練した国語の教師は、学習活動の最終的な目的が知識の習得にあるのでは

なく、豊かなことばの獲得と、あらゆる知識を基盤にした思考力にあることを理解し、ことばによって認識するとともに、論理的に思考し、豊かに想像する態度を身に付けることを、生徒に促している。

B. 国語科授業構想力

スタンダードⅣ：国語カリキュラムと単元の構想

熟練した国語の教師は、授業を構想するに当たって、単元（あるいはカリキュラム）という大きな構造の中にそれを位置づけ、単元全体の目標設定や学習内容の配列、指導方法、評価などを入念に計画している。

C. 国語科授業展開力

スタンダードⅤ：国語の授業展開と指導

熟練した国語の教師は、単元やカリキュラムの目標を達成するために、効果的な教材の選択や授業展開、さらには指導法を工夫し、国語科学習指導を行っている。

D. 国語科授業評価力

スタンダードⅥ：学習評価

熟練した国語の教師は、多様で持続的な評価方法を用い、学習目標の到達度を測るという観点から生徒個人の成長を正確かつ客観的に分析する。その結果は授業の改善、また、学習者の成長の自覚や学習の改善の示唆に活用される。

スタンダードⅦ：指導評価

熟練した国語の教師は、自身の指導を振り返る評価視点を持ち、日々の学習指導についてリフレクションを行い、その結果を授業の改善と自身の授業力の向上に役立てる。

これらの各項目に、会項目として具体的内容が列挙されている。

ちなみに、「教職スタンダード」の「スタンダード1：教職に対する理解と責任感」の下位項目は、次のように提示されている。

- ・今日の社会において学校教育が果たす役割や抱えている課題を理解している。
- ・学級担任としての役割や実務、教員組織における自己の役割や実務を理解している。
- ・子どもの健康・安全・心身の発達に配慮し、教育的愛情をもって誠実かつ公平に子どもと接する姿勢をもっている。
- ・他の教職員と協力して職務を遂行することの重要性を認識している。
- ・職務の遂行に当たって、自分の個性や得意分野を活かそうと工夫している。
- ・職務に関連して困難が生じた場合には、状況・背景・原因などを的確に把握するように努め、必要に応じて、他の教職員・保護

者や地域住民・関連諸機関の専門家などと連携・協力しつつ、解決に向けて行動を起こすことができる。

- ・ 教員としてのさらなる成長をめざして、自己研鑽を積んだり校内・校外の研修や勉強会に参加したりするなど、視野の拡張・教養の深化・実践的指導力の向上を図っている。
- ・ 挨拶・服装・言葉遣い・他者との接し方など、一人の成人かつ社会人として基本的な態度やマナーを身につけている。

また、「中学国語スタンダード」の「A. 国語科授業基礎力 スタンダード I：生徒の理解」の下位項目は、次のように提示されている。

- ・ すべての生徒にことばを学ばせる必要性を確信している。学習の中身としてのことばおよび言語文化は、社会生活を送るという意味で生徒の将来の生活にとって不可欠であり、思考力・認識力・想像力など社会において問題解決をする力に密接に関わっていることを確信している。
- ・ 学習に先立つ生徒の理解状況には違いがあることを認識している。生まれ育った生活環境、地域性を含む社会環境、これまでの学習歴等によって、生徒一人ひとりが異なることば及び言語文化についての知識・能力を有していることを理解している。
- ・ 学習の方法や理解の仕方は生徒によって異なることを知っている。
- ・ 学習のプロセスは、生徒のそれまでの経験や理解状況、さらには発達状況の違いによって、様々な展開を見せることを知っている。
- ・ ことばおよび言語文化に関わる生徒の趣味、個性、好み、性格などを把握している。
- ・ どの生徒がことばに対する興味を持っているか否か、またことばの感覚が鋭いか否かを把握している。
- ・ 生徒の希望する将来の進路と、ことばの力との関係を理解し、それらが進路の選択肢を広げることも含め重要であることを知っている。
- ・ 教師経験の中で蓄積してきた、生徒・ことばおよび言語文化・国語の指導に関する知識のすべてを使って、学習中の生徒の行動を解釈し、理解の状況を把握している。

(5) これらの研究内容は、『研究成果報告書 日・中・韓三国の比較教育学的研究に基づく教科に関する教師教育スタンダードの開発』(2009.3 全95ページ)として冊子体でまとめられている。

その目次は、次の通りである。

I 研究の概要

- 1 研究題目
- 2 研究組織
- 3 研究経費
- 4 研究成果の発表
- 5 研究の目的と方法
- 6 研究の経緯

II 日本・中国・韓国の教員養成

- 1 韓国における教師教育の現状に関する視察報告
- 2 現職教育に関する日・中・韓共同セミナー報告
- 3 中国における小学校・中等学校の役職システムと、教育研究育成活動の概要
- 4 韓国教員研修制度に関する一考察

III 教職経験と職能成長に関する計量研究－10年目教師教育スタンダードの開発を見通して－

- 付 調査内容
- 調査結果(回答傾向)
- 調査結果(自由記述)

IV 教師教育スタンダード案

- 1 はじめに
- 2 教職スタンダード
- 3 小学校全科スタンダード
- 4 中学国語スタンダード
- 5 中学社会スタンダード
- 6 中学数学スタンダード
- 7 中学理科スタンダード

V 成果と展望

(5) 総括

本研究は、諸外国のスタンダード、また、ここ数年盛んに行われた国内のスタンダードの研究や提案を視野に納めたうえでスタートしている。その後、中国・韓国の教員養成・教員研修の制度や方法に学び、現職教員へのアンケートをもとに教師の資質能力について考察し、独自のスタンダードの開発を試みた。

特に、中国・韓国の研究者、中国北京師範大学教育学院 郭華教授、韓国公州教育大学 李明珠教授との交流は、社会や政策と教員の資質との関係等について、きわめて興味深いものであった。また、現職教員へのアンケート調査は、求められる教師の資質・能力を、現場レベルで捉えたと同時に、教師の職能成長の具体について、示唆に富むものとなった。この点においても、一定の研究成果は認められる。

ここに示した教師教育スタンダードは、それらを踏まえ、また、集まった研究者の現場経験に基づく知見をもとにして成ったものである。教師経験10年程度を見通したものであるが、その具体性において、一つの特徴を有している。このスタンダードが、教員養成の具体につながり、また、教員研修の内容

とカリキュラムに活かされていくことが期待される。

しかしながら、こういったスタンダードは、ある意味諸刃の刃である。もとより、教員の資質は言葉ですべて語られるものではない。また当然、さまざまな価値観に基づいており、具体的になればなるほど、正当な異論が生ずる。

つまり、一方では、教員の資質向上のための手がかり、基準として必要なものであり、有効に活用できる側面を持っている。しかし一方、それに基づき、徹していくことが、奇妙なマニュアル対応の資質にとどまり、例えば「教員の個性」「全人的な魅力」などといった視点から、必ずしも本当に求められている教員像に近付かない恐れがあるのではないか。

本研究ではこのことを恐れながら、研究を進めた。マニュアル型の教員を作ることをよしとしているわけでは決してない。この点を確認しながら、より実効性のある可変的スタンダードとして、成長させていく必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計1件)

高旗浩志・三浦和尚「教職経験と職能成長に関する計量研究-10年目教師教育スタンダードの開発を見通して」(2008.9.15 日本教師教育学会第18回研究大会 於・工学院大学)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦和尚 (MIURA KAZUNAO)
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号:40239174

(2) 研究分担者

梅津正美 (UMEZU MASAMI)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号:60284329

岡部美香 (OKABE MIKA)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号:80294776

加藤寿朗 (KATO TOSHIAKI)
島根大学・教育学部・教授
研究者番号:30274301

國宗 進 (KUNIMUNE SUSUMU)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号:50214979

高旗浩志 (TAKAHATA HIROSHI)
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号:20284135

丹沢哲郎 (TANZAWA TETSURO)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号:60272142

(3) 連携研究者

なし